子どもとともに吃音と向き合うための

教材開発の試み Ⅱ

絵本『どもるってどんなこと』作成の過程を通して

○中村勝則（西東京市立保谷小学校）　朝日滋也（東京都教育庁指導部）　太田真紀（都立大学大学院人文学研究科）　長澤泰子（日本橋学館大学人文経営学部）

＊はじめに

2003年 吃音絵本『どもってもいいんだよ』(左図)を作成した。この絵本は、教師が吃音のある子どもと吃音について話し合うきっかけを作ることを目的にしたものであった。
使用したことばの教室の教師から、

① 絵本をきっかけに吃音について話し合えた。
② どもるという言葉に対する抵抗が軽くなり、子どもとの間でも使えるようになった。
③ 子ども自身が自分の吃音について話し始めた。

などの感想が寄せられた。

また、このような感想や指導を通して、子どもとともに吃音に向き合うには、教師の吃音に対する肯定的で、科学的な理解と子どもの《どもりたくない》思いに対する深い共感を前提とすることが明らかとなった。このことは、吃音に対する指導力を高める一方、教師自身が人間を理解する力を深めることも大切ということであろう。

今回は、《吃音に向き合うためには、吃音に対する正しい知識を持つことも大切である》という立場から、吃音の知識絵本を作成した。

1. 作成の経緯

吃音のある成人・子どものことば

① 子どもの頃、自分の話し方に対して疑問や不安を抱いた。身近に教えてくれる人もいず、調べるためのものもなかった。

② 小さい頃、「どうしてそんな風に話すの。」と聞かれて、答えようがなくて泣いてしまった。

吃音指導のための教材の現状

① 吃音の状態や子ども自身の吃音に関する理解について話し合う教材が少ない。

② 保護者・在籍学級担任・児童・生徒向けの理解啓発資料がほとんどない。
（ことばの教室によっては独自に作成）

作成の動機

① 吃音のある成人や子どもの言葉から、吃音にかかわる疑問や悩みなどを取り上げ、解決に向かうための手掛かりや必要な情報を集約し、絵本を作る。
② その絵本を通して、子どもの吃音に対する思いや捉え方を子どもとともに整理しながら、お互いの吃音に向き合う姿勢を育てたい。
③ 吃音に関する正しい知識を保護者・在籍学級担任や児童・生徒、その他様々な人に知ってもらもらいたい。

2. 作成のための5つの基本的な考え

① 小学生中学年以上を対象とする。
② 吃音に関する科学的な知識やデーターなどを分かりやすく表現し、疑問に答える。
③ 吃音のあるなしにかかわらず、自己肯定感を持って生きることの大切さを表現する。
④ 子どもが自分の吃音について自分のことばで語れるようになるためのきっかけとなる絵本とする。
⑤ 家族、学級の担任・児童・生徒、そして、周囲の人々が吃音を正しく理解し、吃音のある子どもとのかかわりが、今まで以上に豊かになるような絵本とする。

3. 絵本の構成と内容（右に完成した絵本を掲載）

吃音がある二人の小学生と一人の中学生が、吃音の研究者（日本橋博士）を訪ね、日頃の疑問や不安を問いかけるストーリーとし、以下の10項目で構成する。

① 吃音のタイプ ② 吃音の波 ③ 吃音の原因
④ 吃音がなおるとは ⑤ 吃音に対して何ができるか
⑥ 吃音への対応（保護者のみなさんへ） ⑦ 吃音への対応（担任の先生へ）
⑧ やらない仕事はない
⑨ 吃音のある人は世界中にいる
⑩ 自分のことばで、自分の吃音を語れるようになろう

4. 反響（保護者を中心に）

吃音に悩んでいたり、困っていることをストレートに表現できていてとても分かりやすかった。また、子ども自身が周りの人たちに自分のことをどのように説明したらよいか、考えるきっかけになってくれれば、今後、吃音とも上手に向き合えるような気がする。
この本の中の一文に「なおらないかも知れない」とあるが、私が子どもになかなか言えないことばの一つである。しっかり向き合うためには、家族の誰かが言わなくてはならないと思うが、未だに話をしていない。このような本があると、第三者的に読み、話し合えると思う。（女児母）

とてもわかりやすくて、絵も親しみやすいので、気楽に読めます。多くの人に吃音を知って頂き、理解してもらうために、是非色々な場所において、皆に読んでもらいたいと思いました。例えば、学校の道徳の授業で取り上げてみるなど・・・。
三人の登場人物のそれぞれ感じた事など、自分の子どもと同じようだと思いました。26頁の「ぼくだって、本当はどもりたくないさ。でも、かくしたってしょうがないって思うようになってきたんだ。」うちの子も中学生の難しい時期にこのような心境になって欲しい。（男児母）

どもることを気にせずに、前向きに生活できればそれに越した事はないと思います。周囲の理解と協力のもとで・・・。
しかし、世間はそうは甘くないというのが私の実感ですが、いかがでしょうか？（男児父）

私が息子に伝えたいのは、「吃音がなおるとは」の所です。「なおる」というのは、問題のあった事が解決されるという事です。言葉は言いたい事を伝える手段なので吃音が問題となるというのは、吃音が理由で言いたい事を伝える事ができないという事だと思います。であれば、たとえ吃音があっても、身振り手振りで補うとか、最後まできちんと言い切るとかで、言いたい事を相手に伝える事さえできたのなら、それは吃音が「なおった」と言っていいのだと思います。（男児父）

＊おわりに

吃音の知識と直面しやすい状況を子どもたちに伝える絵本が完成し、ことばの教室や治療の場で利用がされはじめた。子どもたちからは、「100人に1人もいるんだ。」「原因がわからないなんて残念。」などの今まで知らなかったことを知った驚きの声が上がったり、「ぼくも、自己紹介は苦手。」「ファーストフードで飲み物を注文するとき、SもMもLも《え》で始まるから言いにくいんだ。」など同じような状況を追体験するようなことが語られている。
第三者の目を通して語されることがきっかけで、自分の吃音が語りやすくなるということが実感される。しかし、向き合うと一口に言っても、たやすく向き合えることやら、向き合うには時期尚早のことやら様々である。向き合う内容には、子ども一人一人に適時があると思われる。それは、保護者にとっても同様であろう。一人一人の子ども、並びに、保護者に応じて、向き合う時期と内容を今後の実践を通して検討していきたい。

いみじくも、保護者の方からもこの絵本が広く普及することを願う声が聞かれた。特別支援教育に向かおうとしている現在、その理念であるノーマライゼーションの一環として、吃音の正しい理解が社会に浸透することが重要な課題であると考えている。
吃音の改善という場合、指導（治療）室での改善と日常生活の場での改善が遊離しやすいと言われている。このことに関しては様々な要因があろうが、吃音がコミュニケーションの障害であるという立場からは、吃音がある子どもや大人と接する人々が吃音に関する正しい知識を持ち、吃音のある子どもや大人の思いを知ることも大切であると考える。このための手立ての一つとして、吃音がある子どもたちが、身近な人に、自分の吃音について、自分自身のことばで語りやすくなる環境を整えることが必要であろう。本教材作成の理念は、まさにここにあると言える。

今後、他にもこのような教材が交流され、全国に広がって、真のバリアフリー、ノーマライゼーションが進むことを願ってやまない。